

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01329

研究課題名（和文）マルチ・アーカイブズ的調査によるアジア・太平洋戦争期日本・ベトナム関係史の再検討

研究課題名（英文）Reexamination on Japan-Vietnam Relationship during the Asia-Pacific War Era by Multi-archival Research Method

研究代表者

宮沢 千尋（Miyazawa, Chihiro）

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：20319289

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,600,000円

研究成果の概要（和文）：まず、アジア・太平洋戦争中にフランス領インドシナに軍属として渡り、その後、現地の日本商社で働きながら、ベトナム民族運動を支援した西川寛生氏の1940年9月から1945年9月までの日記全文を翻刻し、注釈・解説を付して2024年3月に『西川寛生「戦時期ベトナム日記」1940年9月～1945年9月』を学習院大学の出版助成を受けて刊行した。また、2024年11月11日に南山大学において、国際ワークショップ「アジア・太平洋戦争期の日本・ベトナム関係の新潮流 - 民間アーカイブズの視点から」を開催した（学習院大学共催）。ベトナム、台湾、フランス、日本からの報告者はいずれ新たな研究視角や新事実を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西川氏の日記には、公的な資料には記載されないか、敗戦時に廃棄されて現存しない戦時期のインドシナやベトナムに関する多くの貴重な情報が同時代資料として記録されている。この日記を翻刻して注釈を加え、流通ルートに乗る形で出版したことにより、多くの読者に読みやすい形で提供することができた。本研究課題の学術的意義や社会的意義はまずこの点にある。

次いで、国際ワークショップを開催して、東南アジアにおけるアジア・太平洋戦争の当事者であったベトナム、フランス、日本、日本の植民地であり「南進」の拠点であった台湾の研究者と学術交流を行ったことは、研究のさらなる進展の展望を示した点で学術的、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）： Firstly, "Hiroo Nishikawa's 'Wartime Vietnam Diary', From September 1940 to September 1945 was published with the support of Gakushuin University. This diary is a valuable first-class contemporary document that contains crucial information on the Vietnamese nationalist movement, its relations with Japan, and the lives of the people in French Indochina during the war, which are not recorded in official documents.

Secondly, on November 11, 2024, at Nanzan University, an international workshop titled "New Trends in Japan-Vietnam Relations during the Asia-Pacific War - From the Perspective of Private Archives" was held (co-hosted by Gakushuin University). The presenters were from Vietnam, Taiwan, France and Japan. Each of them presented new research perspectives and new facts and active discussions were held.

研究分野：近代日本・アジア関係史

キーワード：近代日本・ベトナム関係史 マルチ・アーカイブズ的研究 アジア・太平洋戦争 ベトナム民族運動

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

アジア・太平洋戦争期の日本・ベトナム関係史を研究する際、同時代の一次資料が重要であるが、近年、ベトナム、日本、フランス、および日本の植民地であり「南進」の拠点であった台湾などのアーカイブズ所蔵の植民地政庁文書や外交文書、軍事関係文書などの同時代の一次資料を横断的に収集して分析を行う、いわゆるマルチ・アーカイブズ的な手法が採り入れられるようになり、特に2010年代においてその進展が著しくなった。その背景として、関係各国のアーカイブズが従来に比して、資料公開を進めたことがある。

ベトナムでは、独立と統一のための戦争と革命が長く続き、その後は経済的な停滞に苦しんだが、1986年からドイモイ政策が採用されて、それが軌道に乗ると戦時体制は終わりを告げ、アーカイブズ部門でも所蔵資料の整理・分類が進み、資料の一部がデジタル化され、検索システムのオンライン化も行われ、依然として制限はあるが、ベトナム人に対しても外国人に対しても資料を公開するようになった。

インドシナを植民地支配したフランスでは、2000年代に「アルバネル法」が制定され、今まで閲覧制限がかけられていたインドシナ植民地関係文書や治安関係文書が制限なしに公開されるようになった。

日本においても資料公開が進められており、代表的なものとしては、国立公文書館、外務省外交史料館、防衛庁防衛研究所所蔵の近現代アジア関係の資料をデジタル化、データベース化してインターネット上で公開したアジア歴史資料センターの設立(2001年)がある。

台湾はアジア・太平洋戦争中は日本の植民地であったと同時に「南進」の拠点であり、また1945年8月15日の日本の敗戦後、ベトナムの北半分を「進駐軍」として占領したのは、後に国共内戦に敗れて台湾に移った中国国民党の軍隊であった。そのため、現在の台湾の複数のアーカイブズには日本植民地時代に収集されたフランス領インドシナ関係の資料や、国民党占領期の資料が数多く所蔵されており、オンライン上でも公開が進んでいると聞く。

こうした資料状況を全世界的規模で、具体的にどこにどんな資料があるのかを網羅的に調べ、今後の研究の可能性を展望した驚異的な規模の研究として、白石昌也教授が研究代表を務められた科学研究費補助金プロジェクト「第二次世界大戦日本・仏印・ベトナム関係の集大成と新たな地平」(科学研究費補助金基盤(A)、2013年11月-2018年3月)がある。こうした先行研究を直接、間接に踏まえて、個々の研究者も各国のアーカイブズで横断的に一次資料を収集し分析するマルチ・アーカイブズ的研究に着手しているが、これらの膨大な資料の数に比して、未だ十分な成果が出ているとは言えず、とりわけ2020年からの新型コロナウイルスの全世界的流行により、個々の研究や国際的な研究協力は停滞せざるを得なかった。

### 2. 研究の目的

研究の目的は、アジア・太平洋戦争期の日本・ベトナム関係史を、近年利用が可能になった各国のアーカイブズに所蔵されている一次資料を横断的に分析するマルチ・アーカイブズ的研究方法により再検討し、従来の定説に新たな視点や事実を付け加えることである。

その契機として、具体的には、大川周明が創設した満鉄「東亜経済調査局附属研究所」(通称「大川塾」)を卒業してフランス領インドシナに渡った西川寛生氏(本名・捨三郎)が、現地ではほぼ毎日つけていた日記を翻刻・解読し、その内容を他の同時代の一次資料と突き合わせて、アジア・太平洋戦争期の日本・ベトナム関係の再検討を行うことを主目的とする。西川氏は1940年9月の北部仏印進駐の際に軍属としてフランス領インドシナに渡り、1945年9月に日本に帰国するまで、援蒋物資の没収の仕事や、現地日本商社で働く傍ら、ベトナムの民族独立運動を支援した。

### 3. 研究の方法

上述の西川氏の日記をご遺族の許可を得て、研究代表者、研究分担者、研究協力者らが翻刻・解読する。しかし、日記の文章だけでは、そこに記されている人名、地名、団体名、事件などの背景が理解できないので、研究代表者、研究分担者、研究協力者らが、ベトナム、フランス、日本、台湾などのアーカイブズに関連する一次資料を閲覧・収集し、これらを用いて、西川氏の日記に注釈や改題を付し、書店の流通ルートに乗せて、一般の読者にも読みやすい形で出版する(出版にあたってもご遺族の許可を得る)。

また、ベトナム、フランス、台湾の研究者を招いて、国際研究集会を開き、それぞれの知見や研究の視角について意見を交換し、さらなる研究の進展と研究協力のネットワークを構築することを目指す。

### 4. 研究成果

本研究課題の成果を以下、(1)(2)(3)に分けて述べる。

(1) 上述の西川寛生氏の日記全文を翻刻して注釈、解題を付した『西川寛生「戦時期ベトナム日記」1940年9月～1945年9月』（風響社、2024年3月）を、ご遺族の許可を得て、学習院大学の出版助成を受けて刊行した。この日記は、戦時期インドシナやベトナムにおける日本人の軍事・商事に関する活動や、ベトナム民運動と日本人の関わり、現地の人々の暮らしや生活を知ることができる第一級の同時代資料であり、研究者のみならず一般読者にも入手しやすく、読みやすい形で提供が可能になったことの意義は大きい。また、同日記の内容から明らかになったのは以下の点である。

第一点は、当時のベトナム民族運動の動向や、日本人がそれにどのように関わったのかが、西川氏の視点からではあるが、克明に明らかになったことである。従来、アジア・太平洋戦争期のベトナム民族運動への日本人の関与については一次資料に乏しく、多くを戦後の回想や二次資料に依拠せざるを得なかった。西川氏の日記には、今まで知られていなかった多くの事実が含まれている。もちろん、一個人の視点から見たものがすべて真実であるとは言えないが、今後、さらにマルチ・アーカイブズ的研究方法で一次資料を収集し、さらに検討を重ねたい。

第二点は西川氏のベトナム観、ベトナム人観の二面性が明らかになったことである。西川氏はベトナムのフランス植民地支配からの独立を熱望し、これを援助していたが、彼の行動は日本の戦争政策と無縁のものではありえなかった。日記からは、被植民地の人々の苦しみへの同情とベトナム独立への情熱が感じられる一方、日本の戦争政策へのベトナム人の協力を当然視し、ベトナム人民族運動指導者や民衆の日本への態度に対する不満や、優越意識も垣間見え、その相反する感情が日記の中に交互に現れる。この点は、アジア・太平洋戦争期にアジアに滞在した多くの日本人にも共通するものであり、当時の日本人のアジア認識の限界であろう。

第三点目は、西川氏の日記は、現地駐屯の日本軍、日本の外交機関である大使府、その他在留邦人のベトナム民族運動への関与のあり方がけして一枚岩ではなく、それらの間には対立や葛藤があり、また状況の変化に伴って刻々と変わっていたことを明らかにしている。

日本軍の中でもベトナムの民族主義者をフランスの弾圧から保護する者がいた一方で、憲兵隊は一部の例外を除き、民族運動に厳しい態度を採っていた。また、保護しようとする軍人の中でも、日本の戦争政策に利用することを画策する者、ベトナム独立を本気で支援しようとする者に分かれた。

日本の外交機関である大使府は、アジア・太平洋戦争の基本方針である「静謐保持」を重視し、民族運動に理解を示した者はごく一部であった。

日本企業においても、民族運動を積極的に支援したのは西川氏が働いていた大南公司社長の松下光廣と、印度支那産業の山根道一のみであった。西川氏は松下の下で商社マンとして働きながら、同時に松下の指示を受けてベトナム民族運動を援助した。しかし、「アジア主義的企業家」である松下が率いる大南公司社内でも、松下や西川氏の行動を快く思わない者もあり、憲兵隊から「政治運動厳禁」を通達されるような状況になると、松下や西川氏が冷たい目で見られていた節もある。

第四点は、西川氏の筆致により、当時のフランス領インドシナにおける現地の人々や在留邦人の生活が生き生きと描かれていることである。当時のインドシナ、特にサイゴンは、日本とは比べ物にならないくらい豊かで自由な場所であった。しかし一方で、日記には、連合軍の爆撃で廃墟となった都市の様子やベトナム民衆の被った被害の状況についても克明に記されている。また、伝聞の形ではあるが、1944年から1945年にかけての北部の飢餓状況についても記述がある。この点については、日本軍によるジュート（黄麻）栽培強制の結果であるとの説がある。少なくとも西川氏は、ジュート栽培が北部農民に恨まれていることを知っていた。

第五点は戦時期と戦後の連続である。西川氏が1955年に大南公司のサイゴン事務所再開のためにベトナムに渡航して、戦後賠償によるダム・ダム建設に関わった時期の日記は、本研究課題の研究分担者である武内房司と研究代表者である宮沢千尋の編纂により、2015年に出版されている（『西川寛生「サイゴン日記」一九五五年九月～一九五七年六月』、風響社）。双方の日記を読むことにより、戦時期と戦後のつながりが見えてくる。

例えば、大南会社が1955年にいち早くサイゴンに復帰を許されたのは、戦時期に松下や西川がフランスの弾圧から保護した民族主義者ゴー・ディン・ジエムが政権の座についたためであったし、戦時期に大南公司与ビジネス上の取引があり、また民族主義者として西川氏と密接な関係にあったヴー・ヴァン・アンの息子であるヴー・ヴァン・タイがジエム政権の外国援助部門の担当者であった。大南公司是戦時期から関係を持っていたベトナム人と、そのつながりを活かして商取引を再開しており、また戦時期にベトナムに滞在していた旧日本軍の軍人や日本のビジネスマンが再びベトナムにやって来てビジネスを行う様子も描かれている。このことは、戦時期の日本とベトナムの関係が、けして1945年8月の日本の敗戦によってすべて断絶してしまっただけではなく、両時期の断絶だけでなく連続面にも目を向けるべきであることを示していると言える。

(2) 国際ワークショップ「アジア・太平洋戦争期の日本・ベトナム関係の新潮流 民間アーカイブズの視点から」を2023年11月11日（土）に南山大学で開催した。

発表者と発表題目は以下の通りである。

ヴォー・ミン・ヴー氏（ベトナム国家大学ハノイ大学東方学部専任講師）

「1930-1940年代のインドシナにおける台湾籍民の活用論」

鐘淑敏氏（台湾中央研究院台湾史研究所所長）

「台湾人よ血税を払え 1944年の神靖丸沈没事件を通して」

パスカル・ブルドー氏（フランス高等実践院）

「静かなる20世紀南部ベトナムの知識人チャン・ヴァン・アン（1903 - 2022年）と日本との持続的な関係の研究」

宮沢千尋（南山大学人文学部教授）

「趣旨説明」及び「新資料の紹介：西川寛生戦時日記（1940年9月 - 1945年9月）におけるベトナム・インドシナ」

コメンテーターは白石昌也氏（早稲田大学名誉教授）が務められた。

ワークショップでは、それぞれの発表者が戦時期の日本・ベトナム関係史について、新たな事実や研究視角を提供した。また、西川氏の日記や関連資料、チャン・ヴァン・アン氏の回想録や関連資料、神靖丸沈没事件の関係者の回想記や資料などがいずれも公的なアーカイブズではなく、長らく個人の所蔵によって保存されてきたことから、「民間アーカイブズ」の重要性と、その運営・維持に関する展望や問題点に関して活発な議論が交わされた。また、戦時期と戦後の連続について研究する必要性についても指摘があった。対面とオンラインで30名以上の参加（科研関係者、発表者、司会者、コメンテーター、通訳・翻訳者を除く）があった。

（3）2024年3月に、研究代表者、研究分担者である千葉功学習院大学文学部教授、研究協力者富塚あや子氏の3名が、ベトナム社会科学アカデミーを訪問して図書館で資料収集する傍ら、同アカデミーの日本研究者と短時間ながら、今後の研究協力の可能性について意見を交換した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮沢千尋	4. 巻 1
2. 論文標題 フランス植民地期のベトナム知識人ファム・クインの「言語・文化ナショナリズム」と西洋哲学思想観	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から	6. 最初と最後の頁 801-821
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 武内房司	4. 巻 1
2. 論文標題 旅行記に歴史を読む 竹越与三郎の見た「インドシナ」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新・歴史遊学 覚える歴史学から考える歴史学へ	6. 最初と最後の頁 155-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮沢 千尋	4. 巻 21
2. 論文標題 1945年3月におけるファム・クインの首相辞任	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アカデミア. 人文・自然科学編 = Academia. Humanities and natural sciences	6. 最初と最後の頁 69 ~ 86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15119/00003051	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 湯山英子
2. 発表標題 第二次大戦後ベトナムからの「引揚げ」と「残留」
3. 学会等名 サハリン樺太史研究会 第59回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮沢千尋
2. 発表標題 植民地期ベトナムの言語・文化ナショナリズム－ファム・クインと南風雑誌』を中心に
3. 学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会「東アジアにおける哲学の生成と展開 間文化の視点から」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 北澤直宏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 276
3. 書名 ベトナムのカオダイ教：新宗教と20世紀の政教関係	

1. 著者名 武内房司編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 研文出版	5. 総ページ数 266
3. 書名 中国近代の民衆宗教と東南アジア	

1. 著者名 武内房司 宮沢千尋	4. 発行年 2024年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 586
3. 書名 西川寛生「戦時期ベトナム日記」1940年9月～1945年9月	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	北澤 直宏  (Kitazawa Naohiro)  (00844630)	東洋大学・国際観光学部・助教    (32663)	
研究分担者	武内 房司  (Takeuchi Fusaji)  (30179618)	学習院大学・文学部・教授    (32606)	
研究分担者	千葉 功  (Chiba Isao)  (50327954)	学習院大学・文学部・教授    (32606)	
研究分担者	湯山 英子  (Yuyama Eiko)  (70644748)	北海学園大学・開発研究所・客員研究員    (30107)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	富塚 あや子  (Tomizuka Ayako)		

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 アジア・太平洋戦争期の日本・ベトナム関係の新潮流－民間アーカイブズの視点から	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関